

# 舞台創りから、 まちづくりへ

ふらの演劇工房



1998年12月にNPO法が施行され、翌年2月、全国で第1号のNPO法人として認証されたふらの演劇工房。全国初のNPO法人というだけでなく、富良野演劇工場の運営を受託したことで、公設民営の劇場運営でも話題になりました。

行政との連携で地域の文化活動を支えるNPO法人として期待が高まる、ふらの演劇工房を訪ねました。

## 全国初のNPO法人が富良野に誕生

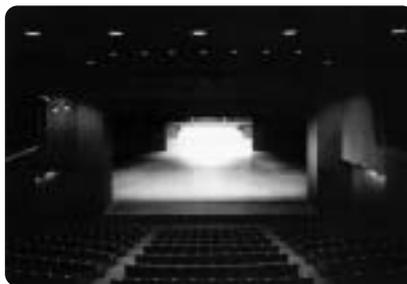
富良野市は、テレビドラマ「北の国から」の舞台になっているまち。まちには、ドラマの脚本を手がける倉本聰氏が主宰する「富良野塾」の拠点があり、脚本家や俳優を目指す若者たちがまちを訪れていました。しかし、卒業後は活動の場がないため、東京に戻ってしまいます。そうした塾生たちを地元でサポートしようと、地域住民による応援団ができていました。

一方で、富良野市には演劇という財産があるのに、地域のなかで、うまく生かされていない現実がありました。応援団の人々は、演劇を通じて、子供から大人まで楽しめるような取り組みが、何かできないかという思いを感じていました。

そうした思いを一步前に進めようと、有志が集まり、'97年9月に富良野演劇文化財団設立準備会を発



木々のなかに静かにたたずむ富良野演劇工場は、JR富良野駅から車で10分程度



富良野演劇工場の舞台

足させます。当初は、財団法人設立をもくろんで準備会を立ち上げたのですが、翌年、NPO法が国会を通過したことから、NPO法人として法人格を取得しようと、方向転換したのです。

それ以前に、準備会では、なぜ法人格が必要なのか、活動の目的は何なのか、ずいぶんと議論を重ねています。そうした議論を経たのち、東京でNPO法人の勉強会に参加する機会を得た篠田信子さん（現ふらの演劇工房事務局長兼富良野演劇工場長）は、自分たちが目指すべきはNPO法人だと確信したとい

います。

当時、すでに演劇にかかわるさまざまな活動をしていた経験から、法人格を得たかったのです。例えば、学校関係者と交渉をする際も、法人格があるのとないのでは大違いです。任意団体であるために、活動の幅が広がらなかったのです。そのため、当時の選択肢のなかから財団法人を考えていたのですが、そこに登場したのがNPO法人でした。財団設立に比べれば、基本財産を集める必要もなく、市民にとって身軽に取り組めることがNPO法人の魅力でした。

また、これまで活動目的を深く議論してきたなかで見えてきたことは、演劇を通して、その楽しみを多くの人と共有しようという、全市的な広がりを目指すことでもありました。演劇というと、ある種マニアックな人たちだけが楽しむものと思われがちです。しかし、演劇には、観るだけでなく、創るという違った楽しみ方があります。子供からお年寄りまで一緒に楽しむ手段を演劇に求めただけと考えていたのです。その楽しみをみんなで共有するうちに、自然とまちが生き生きし、次代のまちづくりに結び付くことが理想です。ですから、市民活動の手段としてNPO法人という組織は、打ってつけでした。

当時は、NPOの認知も低く、前例のない組織であっただけに、反対意見も多くありました。しかし、

なぜ法人格を取得するのかについて、深く議論していたこともあり、他の人々の理解も得ることができました。

財団法人設立のための準備をしていたので、NPO法人申請の書類作りは、財団の書類作りに比べてそれほど大変なものではありませんでした。書類を整えて、NPO申請開始日の'98年12月1日に道庁に出向き、提出、受理されます。そして約3ヵ月後、全国初のNPO認証法人となったのです。

### 舞台を創る場「富良野演劇工場」

ちょうど、このころ、行政側では、市内に劇場を建設する構想を進めていました。当初から運営は、民間委託を想定していましたが、その委託先として、ふらの演劇工房に白羽の矢が立ちます。NPO法人としてスタートしたふらの演劇工房は、その後、行政や劇場建設にかかわった倉本氏との話し合いを経て、'00年4月、新たに建設される富良野演劇工場の管理・運営を受託することになり、公設民営の劇場が生まれることになりました。

劇場建設の過程では、演ずる側、あるいは舞台を創る側に立って、倉本氏がさまざまなアドバイスをしています。おそらく、演劇人にしてみれば、非常に贅沢な劇場といえるでしょう。暗転時に舞台が真っ暗になるようにした黒の内壁、ゆったりとした舞台の両袖、観客全員が前の人の頭が邪魔にならず舞台の床まで見えるようにした勾配のきつい客席、広々とした楽屋、本番前に役者やスタッフがリラックスするためのグリーンルームの設置など……。一度、ここで舞台を踏んだ役者はみな、「ぜひまたここで」と声をそろえるといえます。

また、「富良野演劇工場」という名の通り、ここでは、演劇を創ることに重点をおいており、建物の4分

の3が舞台を創るためのスペースになっていることも特徴です。

建設工事中に作業員から「これは今何を作っているんですか」と質問されたことから、倉本氏は、建設作業員を前に、この工場がどんなものか、施設の使い方、どんな活動がなされるかについて講演を行っています。「この建物は、今建ててくださっている皆さんが、最初の創造活動をしている場です。最初の、ここでのソフト創りに参加しているクリエイターなんだということを、どうか認識していただいて、良いものを、ぜひとも創っていただきたいと思います」と倉本氏は講演の最後を飾っています。完成した富良野演劇工場の入り口には、建設にかかわったすべての人々の名前が刻まれたプレートが飾られ、モノを創る楽しみを知っている倉本氏ならではの演出を感じさせます。

一方、富良野演劇工場は、民間委託を前提に計画された施設であったため、市民にも計画が公開され、市民の意見も盛り込まれています。子供連れでも演劇が楽しめるように防音ガラス貼りの親子室が追加されるなど、工場は、創る側・演ずる側だけでなく、観客側への気配りもされています。建設期間中には、入り口付近の石畳の石を積み上げる作業を市民参加で行うといった趣向も凝らされました。

また、ふらの演劇工房では、これまで行政が行ってきた文化施設の管理・運営方法では、本当に市民が利用しやすいものにはならないと考えていたことから、新たに富良野演劇工場の管理・運営のための条例を制定してもらうことにもなりました。そうした努力が実り、同工場は24時間使用が可能になるなど、使い勝手の良い文化施設としてスタートを切りました。

建設過程に盛り込まれたさまざまな工夫、行政ではなかなか実現できない利用者のニーズに沿った管

理と運営など、NPOだからこそできた前向きな取り組みといえるでしょう。

### ボランティアのあたたかな心が、黒字を支える

ふらの演劇工房の年間予算は5,000万円程度。演劇工場の管理・運営受託費が2,000万円、残りは自主事業と、補助金やその他の受託事業、会費収入となっています。

会員数は500人程度で、会費収入は全体の1割にも及びません。初年度は、あえて一人ひとりにふらの演劇工房の趣旨を説明し、個人会員を募る方法を取



市民の意見で設置された防音の親子室。子供がどんなに騒いでも、劇場内には音がもれない。劇場内の音は、ヘッドホンで聞くことができる



工場内売店の商品は、ボランティアの手作り作品も。ふらの演劇工房と、富良野演劇工場の名前が刻まれたオリジナル商品もある

り、郵送での受付や法人会員は受け付けませんでした。「演劇工房なんて聞くと、何か得体の知れない団体に思えるでしょう。だから郵送で簡単に済ませたくなかった」と篠田さん。現在は、正会員のほか、友の会という準会員制度も設けています。

年間予算5,000万円規模で、収支上は黒字決算となっていますが、それはボランティアの存在が大きな要因です。

ふらの演劇工房では、公演時のお手伝いから、軽食・喫茶コーナーの企画・販売、託児、清掃、ポスターやチラシの配布など、さまざまな形でボランティアとして参加することができます。演劇を知らなくても、役者やスタッフの食事を作ったり、売店で販売する手芸品を作るなど、おのおのができること



昨年夏に行われた映写技術ワークショップの様子



富良野演劇工房で行われた市民劇「カトーを待ちながら」

でボランティア協力することが基本で、だれもが気軽に参加できるのです。現在は市内のほか、東京や札幌、旭川などからも登録が増え、120名ほどのボランティアスタッフが登録していますが、意外にも演劇好きのボランティアはそれほど多くはありません。特に市内在住のボランティアスタッフについては、工場オープン前に、何度も茶話会を開催し、富良野演劇工場やボランティアについて考える機会があったことで、ずいぶんと理解を得ることができました。

そんな経験があったからか、これまでは「ボランティアのみなさんが、軌道に乗るまでお金はいらないとってくれた」（篠田さん）こともあり、全くの無償でした。しかし、今後は、交通費を支給するなど、ボランティアスタッフにも、少しずつ報酬を支払っていきけるように努力しているところです。「ボランティアの皆さんの好意もあり、これまでは赤字を出さないように工夫してきたのですが、今後は、必要な人件費はきちんと出していくようにしなければ長続きしません」と篠田さんはいいます。

確かに、劇場の運営・管理を行政が自前で行っていれば、受託分の年間2,000万円という額は、人件費で消えてしまうでしょう。ふらの演劇工房の運営では、その他の受託事業収入や緊急雇用対策資金の導入、不要になった学校の備品を利用して経費を削減するなど、赤字を出さないために、智恵を凝らしている様子がうかがえ、今後の行政側のさらなる支援が望まれます。

### NPOで質の高いソフトづくり

富良野演劇工場は、JR富良野駅からタクシーで10分程度。市街地からは離れていますが、自然のなかにたたずみ、心が落ち着く空間です。地元の方からは市街地から遠いとの声もあるようですが、冬は真

っ白な雪に、夏は緑に囲まれていることが、富良野演劇工場の特徴でもあります。また、タクシー利用や市内の宿泊施設利用など、今後はさらに経済的な波及効果も期待できるでしょう。

昨年は、小学生から大人までを対象に、次代の演劇人を育てようと新たに工場内で演劇アカデミーが開校され、舞台創りの工場として、着実に前進している様子がうかがえます。また、演劇、和太鼓、映写技術など、各種のワークショップも開催されており、舞台芸術活動の裾野を広げる人材育成の場としても、道内外に少しずつ知られるようになりました。

演劇を見るだけでなく、参加して創る市民劇の開催や、演劇好きでなくても参加できるボランティア活動など、市民が新しい生きがいを見つけるきっかけになっていることも間違いありません。これまでの苦労話を語りながらも、非常に生き生きと、楽しそうに受け答えしてくれる篠田さんを見て、それを実感しました。

これまで文化にかかわる行政の対応は、ハード先行型で、ソフトが伴わない場合が少なくありませんでした。せっかく建設した施設も、利用時間の融通がきかないなど、地域住民が利用しやすいものではなかったといえるでしょう。しかし、利用する側の市民が管理・運営をすることで、より使い勝手の良い、生きた施設に変わっていきます。NPOと行政が連携することで、より質の高い文化活動、よりニーズに合ったソフトづくりが実現できるのでしょう。そして、それが人づくり、まちづくりにつながっていくことが、ふらの演劇工場が目指す姿のようです。

「NPOを取得したいと問い合わせられてくれる方には、なぜNPOを作るのかだけは時間をかけて議論してくださいとお話ししています。そこを議論しないと後からが大変です。目標を見失わないようにしようと常に考えています。そのため、行政に対しても、

対等な立場で意見を言わなければなりません」という篠田さん。

今後、芸術文化にかかわる分野は、人づくり、まちづくりのなかで、大きな要素の一つとなっていくことでしょうが、行政のかかわり方が難しい分野でもあります。市民自らが自発的に活動を進めるNPOという組織が核となることによって、その魅力ある展開が期待できるのではないのでしょうか。



これまでは主婦だったという、ふらの演劇工房事務局長兼富良野演劇工場長の篠田信子さん。楽しそうに話してくださる様子は、NPOが、今までとは違った生きがいの場を発見させてくれることを教えてくれる

NPO	特定非営利活動法人
	<b>ふらの演劇工房</b>
住 所	富良野市中御料 富良野演劇工場内
電 話	0167-22-3800 (工場：0167-39-0333)
HomePage	<a href="http://www.furano.ne.jp/engeki/">http://www.furano.ne.jp/engeki/</a>
正会員	年会費 10,000円
友の会会員	年会費 3,000円
法人会員	一口 10,000円
ボランティア登録	無料